

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2023 年 3 月 1 日 発行
(通巻 496 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 93

- ・新版「武蔵野の歌が聞こえる」 (1)
- ・2022 年度 N P O 現代座活動報告と今年度の方針 (2)
- ・東京都へ提出した N P O 活動計算書 (3)
- ・われらいずこより⑬ 1969-70 年・新しい劇団を (4- 6)
- ・北海道赤平市からの便り (7)
- ・こども将棋大会・ト部美佳子 (8)
- ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 N P O 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



関東一帯から連れてこられた農民は幕府役人の厳しさに耐えられず逃げ出してしまふ。水害に悩む村で育った平右衛門は、子どもや働けない高齢者にも食料を分配する。自分たちの村を作るのだと自覚したとき、農民本来の協同労働が展開される。(初演の舞台より)

武蔵野を協同の大地に変えた平右衛門 新版・武蔵野の歌が聞こえる

「武蔵野の歌が聞こえる」は 2014 年に初演し、2017 年まで毎年公演を重ねてきました。現在も川崎平右衛門顕彰会が毎年開かれており、再演が望まれています。しかしこの作品はピアノの生演奏と合唱で構成される大型作品で、出演者が多く、経費もかさみ、上演時間も 2 時間近くかかります。

もつとコンパクトに芝居を展開できる方法はないだろうか。どこにでも出かけて行って上演できる作品は出来ないだろうか。演出の八木澤賢を中心に、みんなで台本を練り直し、検討を つづけてきました。ピアノの生演奏だけは生かして、5 人くらいの少人数で合唱と朗読と芝居を組み合わせた新しい構成劇を創

ることになりました。あの感動をそのままに、大胆に凝縮したわかりやすい作品をと、みんな張り切っています。どんな舞台になるか、楽しみにおいでください。

◆「武蔵野の歌が聞こえる」あらすじ
わたしたちの住む武蔵野一帯(東京・埼玉)はかつては不毛の大地と呼ばれ、作物の採れない荒地でした。

江戸中期、日本列島は元禄大地震、宝永大地震、富士山大噴火と史上最大の災害に見舞われました。元禄時代のバブル経済で弱体化した幕府は、復興を進めることが出来ません。震災の 10 年後、第八代将軍となった徳川吉宗は幕府立て直しのため、武蔵野新田の開発に取りかかります。けれど相次ぐ飢饉や凶作で新田開発は壊滅的な打撃を受けます。

このとき、開発責任者の大岡越前守忠相は多摩郡押立村の名主・平右衛門に新田の再建を託します。押立村は多摩川洪水の拠点となる村で、村人は常に洪水に対処できる協同の習慣を持っていたからです。

平右衛門は農民の中に眠る助け合いの心を生かし、復興を進めます。打ちひしがれた農民たちは次第に助け合いのよこごびに目覚め、自力で新田を復興させ、開発をやり遂げます。荒れ果てた原野はサクラの里に姿を変えます。農民たちの喜びの歌が聞こえてきます。

会場：現代座ホール 日時：2023 年 5 月 26 日 (金) 15:00 19:30
参加費：一般 3000 円 27 日 (土) 11:00 15:00
大学、専門学校生 2000 円 28 日 (日) 11:00 15:00
高校生以下 1000 円

各回 60 名の予約制です。事前にお申し込みください

TEL : 042-381-5165 FAX : 042-381-6987 メール : gendaiza.ticket@gmail.com

2022年度NPO現代座 活動報告と今年度の方針

◆財政報告

左頁の活動計算書は東京都に提出するものです。

今年度も412人の会員1,208,000円と、35人の寄付239,000円で支えていただきました。本当にありがとうございました。

助成金は『プリンギン・ホテルにて』公演で文化庁の助成をいただきました。

支出では「租税公課」が200万円を超えています。これは通常の法人住民税と固定資産税以外に、土地と建物の不動産取得税が1,375,700円かかったためです。この不動産取得税は、昨年株式会社現代座からの土地と建物の寄贈を受けたために発生した税金で、今年度のみのもです。

それ以外の経費としてはホールのエアコンの修理と、古いセットや器材の廃棄料くらいで、大きな支出は無く、892,455円の黒字になりました。

繰越正味財産には固定資産の土地28,142,000円が含まれています。

◆『プリンギン・ホテルにて』の上演

2022年度は7月7日から11日まで、現代座ホールで5ステージの公演を行いました。ちょうどコロナの第7派が始まる時期で、観客数を制限して238人の方に見ていただきました。

『プリンギン・ホテルにて』は、インドネシア独立



戦争に参加した元日本兵に焦点を絞り、語りを加えた構成劇として木村快が執筆し、八木澤賢が演じました。

戦争体験者は少なくなり、インドネシア独立戦争のことは知られていないことが多く、心配しながらの上演でしたが、「分かりやすかった」「インドネシア独立戦争をはじめて知った」と好評でした。

◆「誰でもできる朗読教室」は7年目に入り、水曜と木曜の昼、夜の4クラス、23人の受講者に増えました。半年間の成果の「発表会」は毎回感動的です。

◆現代座ホールや3F小ホールを使つての稽古や公演は、今年度は増えました。地下の現代座ホールでの公演は9団体、稽古は6団体。3F小ホールは公演9団体、稽古やコース3団体で、コロナ前より多くなりました。現代座に事務所を置く「希望舞台」と「スタジオ・ポラーノ」も新作を発表しました。

◆地域との繋がりを

◎3方教室と「緑町ふれあいサロン」はコロナ禍の中でも頑張つて続けています。

◎3月27日、小金井のアーティスト「腹話術師いずみ」と現代座に事務所を置く「スタジオ・ポラーノ」とのコ

ラボで『お人形わくわくシアター』を企画し、楽しい公演になりました。

◎10月23日、10年前に現代座から独立した人形劇場「花かご」の公演が3階小ホールで実現しました。

◎子どもの集まりでは地元の「みどりこども会」が夏休みに陶芸教室を現代座2階で開き、ご近所の子どもたちが集まってくれたのも嬉しいことでした。

◎12月17日、「遊び・文化NPO小金井こらぼ」が2階会議室で「こども将棋大会」を開きました。(8面参照)

◎2月18日、19日、現代座も入っている「緑町第2町会」で町会の文化行事として、現代座の合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」のDVD上映会を企画しました。これは小平市、武蔵野市で開催された「川崎平右衛門顕彰会」で上映されたDVDをご覧になった町会の役員さんが「ぜひわが町会の皆さんにも観て欲しい」と企画してくれたのです。地域の皆さんに地下ホールの大きなスクリーンで観ていただき「この平右衛門さんのお話は、もつとたくさんの人に見てもらいたい」と大好評でした。現代座としても改めて「武蔵野の歌が聞こえる」の新しい形での公演に挑むことにしました。(詳細は1面)

◆2023年度の活動

今年度は5月の「武蔵野の歌が聞こえる」公演だけでなく、10月には2018年に亡くなった現代座の正会員武本英之さんの作品『わすれものはありませんか?』を再演する予定です。

地域の皆さんやワーカーズコープの皆さんともつと関わり合つて、これからの活動のあり方を考えていきたいと思っています。

(木下美智子)

2022年度 活動計算書

2022年3月1日から 2023年2月28日まで

特定非営利活動法人 NPO現代座
(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取会費		1,208,000
2 受取寄付金		239,000
3 受取助成金等		
公共団体補助金	1,961,000	
民間助成金	0	1,961,000
4 事業収益		
①地域劇場づくり支援事業収益	5,818,808	
②制作上演事業収益	783,500	
③セミナー事業収益	839,000	
④国際協力事業収益	0	
⑤まちづくり事業収益	0	
⑥子ども健全育成事業収益	0	
⑦会報発行事業収益	0	7,441,308
5 その他収益		
受取利息	33	
雑収益	128,718	128,751
経常収益 計		10,978,059
II 経常費用		
1 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	1,561,000	
(2) その他経費		
制作・準備費	0	
創造・上演費	2,519,207	
交通・通信費	244,524	
資料・印刷費	29,402	
消耗品費	540,398	
会報・HP経費	644,205	
その他経費 計	3,977,736	
事業費 計		5,538,736
2 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	408,000	
(2) その他経費		
通信運搬費	172,109	
消耗品費	150,686	
OA経費	56,594	
雑費	256,286	
光熱水道費	1,305,993	
租税公課	2,197,200	
その他経費 計	4,138,868	
管理費 計		4,546,868
経常費用 計		10,085,604
当期正味財産増減額		892,455
前期繰越正味財産額		32,701,342
次期繰越正味財産額		33,593,797

当期において、その他事業は実施していません。

木村ノート◆われらいずこより来たる 第3部

⑬ 1969〜70年 劇団をつくろう

木村 快

前回までの記述

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ

- ①・レポート81号 1950年、新劇運動の分裂
中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。
- ②・レポート82号 1951年、新制作座の出發
ヴェリテ解散。真山、草村、楨村で新制作座。
- ③・レポート83号 1954年、庶民の新劇を標榜
労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。

【第2部】活動に参加した木村快の視点から

- ④・レポート84号 1959年(1)特別研究所開設。
- ⑤・レポート85号 1959年(2)巡演活動の実態
- ⑥・レポート86号 1960年 安保闘争。平和集会
では国際的要人からも注目が集まる。
- ⑦・レポート87号 1963年(1)
インドネシア訪問日本文化使節団の公演記録
- ⑧・レポート88号 1963年(2)
ユートピア新制作座文化センター設立。
- ⑨・レポート89号 1964年
ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。
- ⑩・レポート90号 1965年(1) 世の中から捨て
られた若者たち

【第3部】生まれ変わって

- ⑪・レポート91号 1965年(2) 新しい生き方を
探して
- ⑫・レポート92号 1969年(1) 最初の試練

⑬ 1969〜70年 新しい劇団をつくろう

【あつまるのか】

◆当時の社会状況

1960年代から1970年代にかけての日本は高度経済成長期であり、社会の状況もどんどん変わっていた。テレビ、冷蔵庫、洗濯機が三種の神器と言われ始めた時期である。目先の生活は便利になったが、産業の拡大成長は若い労働力を農村から都市へ集中させ、農村は過疎化し、高齢化しつつあった。

そして労働運動も従来からの左派勢力に対して、政府寄りの右派勢力が増大し、対立が激しくなっていたから労働組合を頼ることもだんだん難しくなっていた。演劇界は新劇グループが映画テレビでの金稼ぎに夢中で、新制作座争議には全く関心がなく、争議団は落伍者として相手にされなかった。

◆何が何だか判らないまま

争議団発足から3年になるのに、どうなっていくのか全く見当が付かなかった。あれだけ騒がれたのだから解散するわけにも行かず、ただ走り回るだけだった。しかし、歌ったり踊ったりする不思議な争議団として話題になり、若い労働者からは喜ばれ、それなりにカンパも集まった。給与制に踏み切れることは出来なかったが、集団で生活していたから、貧しかったけど何とか食えることは出来た。

◆争議団はどうなる

4年目の1969年は、やっと小金井市に小さな稽古場を建てたのに、稽古場を建てるために作った借金

の返済が出来ず、送金を期待していた北九州の公演班からは宿代が払えないので金を送って欲しいと助けを求めてくる。やむなく前年度から療養中だった木村が北九州へ飛んだ。実は誰も全体の運営状況が判らないまま走り回っていたのである。

◆集団の現状

そんな状態でありながら新たに参加した者もあり、1969年初頭には18才から36才までの90名が集団で生活していた。歌と踊りの「青年アンサンブル班」20名、「おふくろさんごんにちわ班」20名、小編成活動10名、公演を準備して歩く準備制作班15名が全国を飛び回っていた。本部では訓練中の新人6名、病氣療養者8名、全体の生活を管理する母親を含めた女性たち10名がいた。

平均年齢は25歳を超えており、子どもも生まれ始めていたから、新しい生活体制を考えなければならぬ。

【新しい劇団を作れないか】

◆どんな劇団を作るのか

69年前半期は前号で報告したように、南九州の成功で財政的にも一息つけたので、後半期は活動を始める前に一カ月かけて、本格的な劇団として確立するにはどうしたらよいかをみんなで考えた。

まず、新しい劇団を作るとしたら、それは芝居中心の「演劇集団」なのか、それとも歌と踊りを中心にした「アンサンブル集団」なのか問題になった。

1960年以前の新作座入団者は演劇俳優として厳しく育てられた。ところが60年の安保闘争以後、踊りと合唱で構成された舞台が中心になり、舞踊や合唱

能力のある者が選ばれて入団するようになった。

歌って踊れるメンバーが多かったから、争議団は一般人の間でも話題になった。そこで残りの古参メンバーと新人を取り混ぜた構成で、木村が俳優の特徴に合わせて創作した芝居が『雑草のうた』であり『おふくろさん・こんにちわ』だったわけだ。(レポートNo.91⑩参照)

◆公演を成功させる力は何か

1969年春に意気込んで飛び込んだ北九州工業地帯では、頼りにした労働組合幹部から「そんな子供だましの芝居じゃだめだ」と突き放された。しかし破綻を覚悟して乗り込んだ南九州の農村地帯では、農村の話ではなく工場労働者を扱った『おふくろさん・こんにちわ』だったのに、圧倒的な成功をおさめた。

農村部での成功は「新しい村祭り」を作ろうとの呼びかけから始まったことが大きい。最初はうつつむき加減だった青年たちが、公演当日にはさっそうとして村人を迎え、公演が終わると村人たちから「ありがと、



出発以来、新人も含めて全員が顔を揃えて会議をするのは初めてなので、みんな緊張してなかなか自由にならない。そこでまず、最初の議題はどうしてこんなに固くなるのだろうということから始めた。

久しぶりでみんなが集まり、楽しかった」と感謝され、「よし、青年団を復活させよう」という動きになった。

過疎化しつつある集落でこそ、人々は心を共鳴させる祭りを望み、取り残された青年たちにも祭りを実現する力が眠っていたのだ。これは新しい「村祭り実行委員会」だったと言っている。

◆村祭り実行委員会の強み

労働組合ではいつも幹部の呼びかけで実行委員会が組織されたが、成功か失敗かはすべて幹部の気分次第だった。しかし村祭りのための個人的な仲間づくりでは、まず予算のあり方から問題になるわけで、みんなでワイワイ検討することになる。だから切符1枚買って貰うにもいろいろ知恵を絞る。それが集落の話題となり、青年たちへの期待となる。新しい劇団を作る上でも、これは大いに学ぶ必要があると確認した。

◆劇場で祭りをつくる劇団にしよう

上演形式がアンサンブルであれ芝居であれ、大事なことは人々が集まった劇場空間を共感共鳴の場にできるかどうかである。だから今までのように団体や組織に見世物を買ってもらうのではなく、共に生きる共鳴の場としての「祭り」を青年たちと協同して作って歩こう。そして祭りの軸となる作品を作るのだ。そこで来年度からはまず都会からではなく、周辺部の農村地帯から祭りを作っていこうということになった。



◆工場で働いてみた。労働は確かに厳しいが、ちょっとした打合せでも相手の気持ちが伝わってくるし、昼休みには一緒に歌を歌うことも出来た。



◆職場を劇場づくりの学校に

もうひとつ問題があった。スタート以来3年間、舞台では労働歌を歌い、「働く者の文化を」と叫んできた。だが肝心の労働者たちのことをよく理解していたとも言えない。実はわが争議団はほとんどが大学や専門学校出身者で、労働体験を持つ者はほとんどいなかった。追い出されるときも「お前たちは社会のことが全く判っていないガキどもだ」と毒づかれたことを思い出す。

しかし、次は工場内でのドラマ「希望」を作る予定だ。それならここで思い切って、しばらく工場で働いてみようということになった。そこで30人のメンバーを選んで、40日間、都内のKゴム工場、T紙工場、Rミシンに潜り込んで働いてみた。工場内の食堂で労働者と一緒に昼食をとり、一緒に街でお茶を飲み、職場内の矛盾や身の上話などを聞く。自分たちも働く者の一人としての実感が持てるようになった。

それからは労働組合にお願いに行くのではなく、仲間として話しかけることが出来るようになった。

【1970年・木村抜き体制が生まれる】

◆ふたたび木村倒れる

1970年は話し合いの成果をふまえ、東京都内の支持者を対象に「創立5周年記念集会」を開くことになった。そして秋には新作「希望」を公演する予定である。ところが3月、木村がまた倒れて動けなくなつて入院。検査の結果はメニエル病ではなく内臓にも異常があり、2度にわたつて手術を受けることになった。木村抜きで運営するしかなかった。

◆今度こそ木村抜きでやってみよう

実は1968年に木村がメニエル病で倒れた時も大騒ぎして総会で新しい運営委員会をつくつた。しかし運営委員を決めただけで、総会が終わるとみな現場に入ったため、全く機能していなかった。

◆なぜ木村が責任者だったのか

争議が始まった時、学生運動の経験者は何人もいたのだが、新聞で左翼集団の企みではないかと騒がれたので、争議をサポートしてくれた組合関係者と話し合つて「表向きのリーダーは活動家の感じがない木村にしよう」ということになったのだ。

◆いつもみんなの後ろにいた木村

木村はリーダーになれるタイプではなかった。植民地で生まれ、敗戦後は家族が離散し、義務教育も満足に受けていない。だから新制作座時代もみんなの後ろにポツンと立っているだけだった。

ただ、子ども時代はどこへ行つても集団いじめを受けたから、いじめと向き合つた経験だけは豊富だった。常識の通用しない争議中の混乱の中では適切な判断だったかもしれない。とにかくみんなの状

態をそれとなく見守り、現場から相談されれば一緒に考え、問題を抱えたメンバーがいれば慰め、まとめる努力をした。療養中も自由に相談に応じた。

◆新しく創作演出部が創設された

新しい運営委員会では本部に事務局長が常駐し、定期的に打合せをするようになった。そこでは現場責任者が集まって討議し、誰が傍聴してもよいことにした。それだけのことで全体に活気が出てきた。

本格的な劇団を目指すため、新しく創作演出部が生まれ、初仕事として5周年記念集会を開くことにした。

【新しいスタイルが生まれ始めた】

◆新しい作家が誕生

創立5周年の集会ではちよつとした演目を紹介することになり、機関誌編集や舞台美術を担当していた石塚克彦が構成演出することになった。「天国と地獄セブンティ」と銘打つた舞台である。モダンバレエを交えた踊りと、コント風のドラマで展開するもので、さすがに美術家らしく劇団のイメージを一新する華やかさがあつた。これがきっかけで石塚は長期公演用のミュージカル作品として、『オモチャの青春』を書き始める。新しい作家が誕生したのである。

◆ひらがなの台本

木村のメニエル病は方向感覚を司る三半規管の障害で治療法がない。そのため躓いて倒れることがあるほか、右の耳は全く聞こえず、右手も震えて肉筆で字が書けなくなった。しかし木村は英文タイプを打つた経験があつたので、ひらがなタイプライターを購入して貰い、ひらがなで台本を打ち始めた。新しい作品の内

容はみんなが体験した労働現場の話/materialにして『希望』というタイトルにした。

何人かに分担してもらつて、ひらがなだけの台本をかな漢字文に書き写して貰う。すると書き写しの段階でいろいろ意見やアイデアが出て、全体の話題になる。そしてこの役は誰がいいかといったことまで議論になる。これは思いがけない効果で、みんなやる気になった。

◆職場体験を土台にした『希望』の完成

執筆段階からみんなやる気になつていたから、キャスティングもみんなの合意で決め、稽古の準備も自主的に進められた。演出はみんなの推薦で日下部ひろしさんが担当することになった。日下部さんは前座の文芸部に在籍したことのあるベテランだった。

このみんなで作る芝居作りのスタイルは統一劇場独特のやりかたとして定着していった。

【以下次号】



【希望】金の卵とおだてられて農村から送り出されてきた若者たちは、中堅層やベテランたちに反感を持ち、トラブル続きだった。

ところがあるとき、年老いたオッサンが怪我をしたことから不思議な心の触れあいが広がった。

NPO現代座のみなさまへ

「虹に向かって」と「礎(いしずえ)」の紙芝居DVDが完成しました。

今年は寒い冬ですが、皆様お元気でお過ごしのことと思います。「虹に向かって」公演から21年が過ぎました。私たち“きずな”は、このまま快さん、現代座のみなさんの心のこもった赤平の歴史作品を埋もれさせたくないと思い、紙芝居を作りました。

私たちも高齢化で今後の方向性を模索しながら、今回この2作品をDVDにすることができました。素人の作品ですが、心のこもった作品になったと思います。お送りいたしますので、懐かしく楽しんでいただけたら嬉しく思います。

制作中はいつも、快さん、岡田京子さん、美智子さん、現代座の皆さんの思い出話をしながら作っていました。時はたっても、私たちの心の中では現代座のみなさんはあの頃のまです。

“きずな”の会員は少なくなりましたが、温かい仲間たちと楽しく完成できたことを心からうれしく思っています。これもすべて現代座のみなさんのおかげと、思っ、会員一同心から感謝しています。

ありがとうございました。

赤平市民劇場“きずな”代表・高橋紀子



◆きずなの仲間たち、まだまだ元気だね～(木村)

紙芝居を撮影したDVD



赤平市在住のNPO現代座会員、高橋紀子さんから市民が創作した紙芝居DVDが届きました。

北海道 赤平市あかびらからの便り

◆「虹に向かって」について

2002年8月、赤平市元幌岡小学校、茂尻中学校体育館、赤平市文化センターの3カ所で4ステージ上演。

①この取り組みの特徴は、まず演劇活動の経験が全くない中高年の人々がグループを作って取り組んだこと。

②町の歴史を振り返り、新しい暮らしのあり方を話し合い、自分たちで作品をつくり、歌をつくり、それを子どもたちと一緒に演じたこと。

③廃校になった小学校を新しい文化の場にしたいと、子どもたちと一緒に仮設舞台をを作って上演したこと。

観客は500人が目標だったが、2,000人に達した。



◆赤平市民とNPO現代座 木村 快

1965年に争議団から出発した統一劇場は1983年に構成員の希望で「ふるさとときやらばん」希望舞台「現代座」と三つのグループにそれぞれ独立。年配組の家族持ち集団、現代座は1998年に解散。ところが解散が決まったとき、諫早湾締め切りに抗議する人々がやってきて、諫早救済の訴えを劇にしてほしいと頼まれた。やむなく木村個人の仕事として少人数で「虹の立つ海」を制作し、全国を上演して回った。

北海道では新得町に公演事務所を置いた。するとほるる赤平市から1971年に「今日もどこかで」を取り組んでくれた実行委員のメンバーがやってきて、街を元気にするミュージカルを作ってくれないかと言う。無理な事情を話すため赤平市へ行った。なんと教育委員長以下、街を挙げての人々が待ち受けていた。

赤平は明治時代から日本の産業を支える石炭産業の大きな街だったが、相次ぐ炭鉱の閉山で人口は激減、街は火が消えたような状態だという。だからなんとか町おこしとして、子どもたちを元気にしたいのだという。そう言われると断ることが出来なかった。

木村は2001年夏から赤平市に住みこみ、必要に応じて元劇団員や岡田京子さんの協力を受けて市民による創作グループを結成。2002年8月、市民創作ミュージカル「虹に向かって」を制作し、上演。これが新しいNPO現代座を生みだすきっかけとなった。

グループは赤平市民劇場「きずな」を結成、街が生まれ、歴史を描いた「いしずえ」が制作された。

気がつくともう87歳になる。紙芝居DVDを観て驚き、涙が出た。嬉しかった。生き延びていて良かったと思った。仲間たちありがとう。



八木澤賢 八木浩司 青木文太郎 東志野香
木下美智子 木村快 卜部美佳子 長谷川葉月

卜部美佳子4年ぶりの出席

NPO現代座ホームページ担当の卜部美佳子が4年ぶりで現代座の会議に出席しました。卜部は北海道札幌市出身、1990年に現代座に入団。メカニズムに強い女性で旅公演では音響関係を担当、ホームページも彼女の提案で開始しました。2012年からは夫の故郷・青森県弘前市へ移住。子育ての傍ら地域の伝統文化「こぎん刺し」の普及活動に携わりながらホームページを担当しています。今回は弘前市から「弘前市移住セミナー」の講師として東京に出張する旅費が支給されたので、本当に久しぶりで顔を合わせての歓談が出来ました。



こども将棋大会

12月17日(土)午前中「遊び・文化NPO小金井こらぼ」の「こども将棋大会」が現代座の2階会議室で開かれました。「小金井こらぼ」は、心に残る体験を子どもたちに届けたい、と色々なワークショップなどの活動をしています。「現代座会館を地域の活動に活用することを一緒に考えていこう」と話し合い、まず「こども将棋大会」をやることになったのです。子どもたちは礼儀正しく挨拶して、次々と対局していきます。こんな風にも子どもが生き生きと楽しむ場所に使ってもらえるのは嬉しいことでした。

現代座会館 12月～2月 活動日誌

12月21日 NPO現代座会議

- 23日 「現代座レポート92号」発送作業
- 28日 蔦谷栄一夫妻来訪
- 1月4日 木村快を囲んで新年会

18日 新快塾

- 22日 NPO現代座会議
- 28日 卜部美佳子、弘前より来訪
- 第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

- 12月5～8日 ふるきやら「瓶ヶ森の河童」稽古
- 9～11日 「劇好サボテンアミーゴ」公演
- 19日～26日 「演劇ユニット東京ナイフ」公演
- 2月5～6日 「演劇仲間ごのみ」稽古
- 8～10日 ふるきやら「瓶ヶ森の河童」稽古
- 18・19日 緑町第2町会DVD上映会
- 24日 「スタジオ・ポラーノ」稽古
- 26日 「演劇ユニットHagakure」稽古

【三階小ホール】

- 12月7～9日 「スタジオ・ポラーノ」稽古
- 24・25日 八木澤 舞台道具製作
- 1月7～8日 秋千「帰還・ガドルフ」公演
- 2月24日 希望舞台「すまねえな」稽古
- 25～27日 劇団道駆け 卒業公演
- 隔水曜・木曜日 朗読教室
- 毎火曜・木曜日 ムガ教室

【二階サロン】

- 12月17日 緑町第2町会役員会
- 17日 「NPO小金井こらぼ」こども将棋大会
- 1月28、2月11日 現代座 台本会議
- 2月4・11・18・25日 「劇団獣申」稽古
- 27日 川崎平右衛門フェスタ実行委員会
- 毎水曜日 熟年パソコンサークル

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

- 一般会員 3,000円
- 協賛会員 10,000円（1口以上）
- 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座